

---

# 行きずり王女

虹雪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

行きずり王女

### 【Zコード】

Z9349A

### 【作者名】

虹雪

### 【あらすじ】

機械でできた空がある国で、突然会社をクビになった穂高の日常  
が一枚ずつ變っていく。

「いつからだろ。この女がここにいるのは。

青空が一枚めぐられ、乳白色の空が一面に広がる。そして、無害な結晶が空から落ちてくる。

ここは、機械で空が代わる国。事務的に、味気なく、天気予報は命中率百パーセントだった。

白い結晶は女の肌に溶ける。長い墨色の艶やかな髪を穂高の手に絡めて今は、一人夢の中にはいる。

穂高は、先日から三年勤めた会社をクビになり、今、食っていくのがやつとという状態だった。

そんな彼は今、ふつて沸いた災難に頭を抱えていた。

穂高の住む、都心より少し離れたビルの屋上で横になり、ふと目を閉じた。数分の間意識のない間に、女の艶やかな髪が手に絡まつたままほどけずにいた。

女はどこかで見たことのあるような顔をしていた。

「……っんん」

女が声を発する。穂高が女の肌を突つついでみたのだが、それでも女は起きない。

絡みつく髪の毛も一向に取れない。穂高の肌に巧妙に絡み、手首を強くて強情な糸で何重にも巻いて、ぐしゃぐしゃにしたようだつた。

白い雪が一人に降り積もり、積もった雪の高さが三センチになつた頃、穂高起き上がり女の頬をひっぱたいた。空氣と雪の結晶と共に景気良く鳴り響く一撃。

「いっつたあつ」

ついに女が起き、ほっとする穂高をよそに女は涙目で、片方だけ紅色に染まつた頬を両手で押さえた。

「お前、何をする」

怒りを含んだ声はとても魅力がなく思え、穂高は一呼吸間を置き首を傾げた。穂高は滅多に怒る事がなく、同僚からはよく菩薩様と呼ばれていた。

そんな穂高が、長い間に溜めた怒りを一瞬で発散させた後は、菩薩以上の穏やかさで間の抜けた返事をする男に戻っていた。

「ああ？お前、何首傾げているのだ。お前が私の頬をはたいただのだろ」

「あー。うん。久しぶりにキレちゃつた」

「何かわい子ぶつてんですの、腹立たしい。……いたつ。お前はなぜ私の髪の毛をひっぱつてこられるのです」

女の怒りは喋る度に上がる。

「いっちが聞きたい。あなたは誰なんだ」

「……私は」

「言えないのか」

「……言いたくない」

「やうか。じゃあいい。だがこれは外してくれ」

穂高は髪の毛で絡まつた手をかかげた。女は眉をつり上げ凝視する。穂高の漆黒の瞳、その奥を。

「私の髪の毛は、何といつか。特殊で、気に入つた者を離さないのよ。私も頭を抱える問題なの」

「気に入つた者つて俺か？」

「難問ね。私は寝ていただけよ。そもそも、いじせどいかしい」

「いじは中古ビルの屋上だよ。ってかあんたは誰だよ」

「私は……だから言えないと」

穂高は、「あつ」と短く声を上げてぱたぱたと顔の前で手を振る。

「間違つた。名前、聞きたかったんだ」

「名前か。私は李々杏、髪は出来れば焼かないでほどいて。焼くと災いが降りかかるから」

李々杏は眞面目に言つものだから、穂高は否定出来なかつた。二人は寒さに耐えれなくなり、穂高の住む部屋に行つた。

穂高の部屋はきちんと整理されており、几帳面さが伝わってきた。李々杏はさほど広くはないリビングに案内された。

「やういえば、李々杏。あなたの顔どこかで見た気が……」

「氣のせこよ。ビリにでもあつます」

穂高は自分の、赤土色の髪を空にしている方の手でくしゃっと搔く。穂高は李々杏に手伝つてもらいながら温かい珈琲を入れて、ソファに深々と座る。

空がまた一枚変わり、乳白色の空から鮮やかなオレンジ色の夕日になる。

穂高はリモコンを使つてテレビを付ける。ちょうど、ニュースが流れていた。

「えー。本日の朝方頃に我が空替国的第一王女が逃亡……あ、いえ失踪いたしました。見かけた方は」「一報、又は王室までお連れ下さい」

テレビの中のアナウンサーは、普段はあまり咬んだりとちつたりする事がなかつた。

「よほど慌ててんだな。朝方なのになぜ今頃慌てて放送してるんだろ」

「き、氣づかなかつただけではないかしら」

李々杏は妙にうわずりながら声を発した。ニュースでは呼びかけた後、アナウンサーが写真を出した。第一王女の写真と言ひながら出した。

「あれ?」

穂高は細田になり、もつ一度確認しようとした時、李々杏が素早

くつモモンを取り、消す。

「今のつて李々杏じゃないのか」

「この世に似た顔は三人いる。その内の一人です」

そう言い張る李々杏だが、李々杏の面立ちはそこらに居そうな雰囲気はなかった。

通った細い鼻筋に、少しつり上がった鈍色の瞳がとても印象的だった。

「王家の人にそっくりだな」

「いえ。この世には似た顔が……」

「いや、もういいから」

同じ言葉を淡々と言つ李々杏を制止し、穂高は詰めよう。

「第一王女なんだな」

「……はい。えーっとシーッ」

穂高以外誰もいないのに、李々杏は必死だった。

「だとしたら厄介だな。確か、運命の人を決める髪を持つんだったよな。絡まつて」

「し、知りません」

「髪が導くんだよな、運命の人を。王室の女のみにある伝説つてこ

の前でレビューやつたよな

また李々杏は知らないと言つたので、穂高は手をくじりと引くと「いたつ」と言つて李々杏は頭を押された。

涙目になつた李々杏に穂高はもう一度聞いた所、事実を認めた。

「あなたサドでしょ」

「何で王女様がそんな言葉知つてんだよ。それに俺は穂高つて名前なの」

「穂高、いい名前ね」

「……あつがとい」

照れくさそうに、鼻の頭を搔き本題に入った。

「つて違うだろ。話してよ本当のこと」

「チツ」

とても王女とは思えない舌打ちに、穂高は心の中で静かに突つ込んでいた。

李々杏はいつの間にか、闇に包まれた空を見て言つた。

「王室は籠の鳥なの。何をするのでもボディーガードやメイドがいて、何一つ自分でしたことがなかつたの。だから逃げ出して、がむしゃらに走つて途中から記憶がない」

「えつ」

李々杏は頭を抱えて唸り声を上げる。

「気力だけで走っていたか？」

「王室からここまで歩いても一日はかかるよ」

穂高の声がうわずり、目玉が飛び出そうになつた。

「お願い。捨てないで。私そこには戻りたくないの。穂高のこと全然知らないけど、代々伝わるこの運命の髪は本物なの。穂高が運命の人なの、だから……」

切実な李々杏に穂高は、今の現状も考えずに答えた。

「分かったよ。何とかしてやるよ」

穂高の一言に李々杏は急に、顔がぱっと華やいだ。

「本当だ？」

「ああ」

穂高は何も考えずにまた答えた後、李々杏の顔はますます華やぎ、今まで強情に絡まっていた髪の毛がするりと穂高の手を離れた。

「離れた。何で？」

驚いている穂高をよそに、李々杏は口端を持ち上げ満面の笑みになる。そして静かに語った。

「嬉しいわ。穂高。あなたのために一ヶ月間練りに練つた作戦が成功したのね」

「作戦……つて」

「一ヶ月前、あなたを国祭で見て一日惚れしたの。王室には内緒でやつたことは事実よ。そして、あなたをここで見つけた。予測通り私の髪は寝ていたあなたに絡まつた」

空がまた一枚変わり、さらに漆黒の闇を作り出した。

「これから王室の奴らが私を探すけど、穂高は私を捨てないんだつたら一緒に逃げてね。約束を破る者には災難があるから」

悪魔のような李々杏の言葉に、意識を失いそうになる。

「前途多難だ」

ふつて沸いたこの騒動に穂高は、なぜか不安の中に混じつた不確かな変化を感じていた。

「劇的な人生の幕開けだな」

希望なのか、絶望なのか未来は分からぬまま、また空が一枚変わった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9349a/>

---

行きずり王女

2010年10月21日22時28分発行